

# モーター サイクリスト

'82 1



新春躍進号

サーキット&定地テスト●ライバル車との性能比較●録音構成「ユーザーの声」  
巻き返しを狙うホンダのスーパーミドル

ワイド試乗  
チェック!

ホンダ

# CBX400F

★ショッキングバラエティ / **ニューモデル特集** ●ホンダストリーム●MBX80●スズキDR125&250●原付4輪CV1●出揃った4メーカーのターボ集中解説ほか…

★NEWメカ&NEWパフォーマンス  
オール '82市販モトクロッサー比較試乗

●集中研究 The 防寒具 ●わずか7秒で賞金2万ドル! 本場アメリカのドラッグレース ●プロから明日を盗め! バイク界あの人この人の生活と信衆  
●連載第1回 片山敬済の人生問答 ●連載第2回 ローカルイベント道場破り

★ジャンボピンアップ付録:スズキGS650ターボ



# 1981年度 ツーレポ大賞 決定!



本誌編集部が1981年度より設定した「ツーレポ大賞」の選考委員会は11月6日日本社会議室にて行われ、大賞1作品と準大賞1作品を決定した。ここに大賞受賞者のことば、選考経過、そして大賞作品を掲載する。

## ★大賞 <賞金10万円>

1月号「2月10日ひとり日本海へ、真冬の日帰りツーリング」

金子幹典 (20歳・茨城県古河市)

## ★準大賞 <賞金5万円>

8月号「ポートピアまで往復1,200km、原付トリオのルンペン旅行」

滝宮太郎 (17歳・神奈川県藤沢市)



## ●受賞のことば

金子 幹典

エッ? エッ? じゅうまんえんノ私が大賞ノ(大将?) スゲー。これが最初の連絡のとき…。そして今、目の前に「ツーレポ大賞」

が水引きまでくっつけてあるのよネ。しかし、ボツにならずに載っただけでもたいしたものなのに、頭、アタマですヨ。Big-Boyの人間は「当たった」と表現してるけど、これひとえに根性のタマモノですヨ。

でね、受賞決定の連絡のあった日は、大賞さんが1年前、1億円を自分のモノにした日だったんです。奇遇だなア〜。

### 【金子幹典ケン略歴】

昭和36年2月7日、栃木県宇都宮生まれの20歳。16歳の春、中型二輪免許取得。XE75やTLに乗る。出身校の県立総合工業高校は、いまだにバイク通学が認められているという。現在はホンダ系のディーラーに勤務する整備士である。2輪担当を望んでいるが、いまのところ4輪担当。陽が落ちるまで河原を走りまわった高校生の頃が恋しいという。賞金は、革ツナギの製作費にまわすとか…。

## 選考経過 大賞決定まで熱い論議が闘わされた——

### —各委員推薦の弁—

事前に選考委員10人(編集長・編集部員・ツーレポ担当)の推薦状によってノミネートされた作品は、次の5本(敬称略、< >内は推薦者)。

- 1月号「2月10日ひとり日本海へ、真冬の日帰りツーリング」金子幹典→①と略、以下同様。<川島・古谷・白松・北村・小寺>
- 1月号「女ひとりの43日間、西日本ミッドレングツーリング」本間久江→①' <小宮>
- 7月号「我ら英彦山探険隊、ミニホイ

ラー11台で滑走ツーリング」山下和博→⑦ <大光明>

- 8月号「ポートピアまで往復1,200km、原付トリオのルンペン旅行」滝宮太郎→⑧ <小寺・白松・石居・黒松>
- 12月号「甘っ子ミーチャンの体当たり北海道挑戦」秋葉美津代→② <石居・松尾>

松尾(司会) ではまず、各自の推薦の弁を述べていただきたいと思います。(最初に、欠席者2名<川島・小寺>の推薦状を代読)

川島 ①が非常に印象強く、大賞にふさわしいと思う。(以下略)

小寺 ①…なんといっても電話ボックス宿泊が泣かせます。⑧…エピソード豊富、17歳らしい素直さ、金のなさが胸を打ちます。(以下略)

古谷 文句ナシ、①の金子さんへノ この文章を読んでいると、この人にとって2月10日ってのは本当に記念すべき日だったのだな、この1日を走ったことによって、この人自身もすごく成長したんだな、という感じが強く受けますし、そう思ったさすがさすがが文章全面に出ている。

また、彼はなかなか感性が豊かで観察力も鋭い。それを文章に置きかえる力も大したものがある。寒暖計の記録が効果的に使われていて、読んでいるほうもだんだん寒くなっていくというやり方もうまい。これからもいいツーレポが期待できそうだ。

白松 ①とにかく非常に臨場感がある。温度とかを記録しているのも新しいアングルみたいな感じがするし、他人や他車に対するちょっとヒネクれた感じもいい。泣かせるな。

ただ私の場合、⑧も推薦して、これには若い人のがんばりツーリングの原点みたいなものがある。テクニク的なものとか感動の面では①なんだけど、そこをあえて抑えてでも若い原付トリオに、という思い込みもあるんですけどね。

大光明 ⑦は使用車が50~90ccのミニホイラーというのがイイ。それでも重量車に勝つとも劣らぬ走りの楽しさが得られることを実証しているよね。金をあんまり使っていないのも気に入ってる。モーターサイクルの世界を中年男たちが本当に楽しんでいるのがよくわかるな。

長距離だ、雪だ氷だという所を、自分の体を痛めつけて走ることもいいけれど、そればかりじゃない、これもひとつの楽しさだ、ということで選びました。北村 僕は①を推薦します。極限状況というネタ自体だけでも十分読ませるものなんですけど、言葉の使い方も洗練されていて、たとえば事実を主観で語るというような難しいこともやってのけてる気がした。

そして、このページだけめくるときにバリバリと音がするよな、そんな「冷たいページ」をうまく演出している。大変臨場感豊かな、すぐれた作品ではないかと思えます。

石居 推薦したのは⑧と⑫だが、どちらかというど推したいのは⑧。とにかくツーリング内容が面白い。3人で何でもできちゃうみたいな若さがあるね。⑫は、女ひとりで2,500kmもよく走ったノというガッツだね。

黒松 僕はなんで⑧かという、なんといってもその行動自体と、それをすごく明るくとらえていて、若々しくていいということやね。

松尾 ⑫はツーリングの本来持っている一番単純な面白さ、初めてのロングツーリングで受ける感動がひしひしと伝わってきて、新鮮で楽しいレポートになっている。読後にすごくそう快感があったので推薦した。

小宮(ツーレボ担当者) ①'には果敢なチャレンジ精神と「なんとかならあな」というトボケた味がミックスされていて、「ようやったノ」と言いたくなる感じで気に入ったんですけどね。だけどちょっとまとまりすぎて、かえって印象が弱いかな…。

— 2作品をめぐる論議 —

— というところで、少数派の作品も消すのは惜しいが、多数決でいくと①と⑧が

ダントツの人気。この2作品をめぐる論議が沸いた。

古谷 やっぱ①の金子さんをドーンと推したいですね。ただ、この人がやったツーリングというのちょっとヘビーですし、ほかの楽しみ方もあるんだという意味で、⑧も次点として入れてあげたい。白松 両方とも次点扱いというのはどうだろうか？

黒松 ツーレボというのは、文章はうまくいって越したことはないんだけど極端な言い方すれば、その人のツーリングに対する見方、とらえ方の問題やと思うんですよ。で、⑧はハブニングの連続みたいやけど、それはあの人やからこそ起きてきたことやと思うし、そのバイタリティというかパワーにすごくひかれるものがある。①もいいんだけど、やっぱり⑧のパワーの前にはちょっと弱いな、て感じがする。

石居 ⑧は3人だからこそできた、という感じがすごくするんだけどね。

小宮 私は3人だからって気はあんまりしないんで、やっぱり滝宮さん自身の行動力とか物の見方ゆえに事件として取り



②作品にしばってからの論議には多大な時間が費やされた！

扱えた、と思えます。

それにしても、全員がモロ手をあげて「絶対おすすぬ」といえるような力作はなかった、という意味で、2本に賞を分けたらどうかしら？

松尾 たとえば両方佳作にして、賞金は半分ずつというのはどうですかね？

古谷 初めの大賞だし、最初から佳作というよりもひとりに大賞をあげたいけれど、ほかはなにもナシというのもしのびないから、それも悪くないと思います。大賞2本というのもいいですけどね。

(笑)

大光明 私も、大賞1本よりも佳作2本というのは賛成ですけどね。

松尾 '81年の36本中の最優秀作ということで考えれば、1本にしちゃってもいいような気もするけどね。

白松 僕は期せずして2本推してるわけだけど、どちらもそれぞれの持ち味というのがいいわけですよ。けども、じゃあ大賞はって考えた場合には、どちらもも

うひと味あれば、というところだね。石居 接戦ですな一。

古谷 いや、もう一度原点にもどって、好みの問題でズバリ言えば、やっぱり①ですね。

石居 ズバリ言えば、僕は⑧だね。古谷 ①には、モーターサイクルに乗って旅をするという心情が本当ににじみ出てますね。「ああ、がんばってるやついるんだ、俺もツーリングしてみよう」という気にさせますよ。

黒松 いや、僕も①もすごい好きなんですけど、⑧の場合もですね、軽く書いてることだけですごくその人の人間性が出てくると思うんやね。だからやっぱり⑧は捨て難い…。

— ここで改めて、受賞作を1本に限るかどうかが問題になったが —

石居 これだけ議論してもどっちも捨て難いだったら、原則としてはあくまで大賞1本だけれども、こういう風に紙一重で競った場合には準大賞を設けることもある、ということはどうだろうか？ 今回初めてだからね。で、討議したらこういう風になっちゃったんだから。どっち

が大賞に選ばれても、もう一方は準大賞ということでしょう。

松尾 そういうことで、いいですか。では、採決に移ります。

— ギリギリで「あと2分待ってくれ」の声もあり、決めかねた委員たちのつらそうな表情の中、拳手による採決が行われた。その結果—

①=5人(川島を含む)

⑧=4人(両方併記の小寺を除く)

まさに僅差で、'81年度モーターサイクリストツーレボ大賞(賞金10万円)は、①の金子幹典さんの作品に決定。準大賞として、⑧の滝宮太郎さんにも5万円を贈ることになった。

各選考委員には胃の痛み思いの1時間半だったが、ふたりには心からおめでとうを言いたい。きっとまたいいレポートを書いてくれるだろう。

そして、'82年はキミの番だ。引き続き、たくさんの方に残るレポートを待っています。

1981年度  
ツーレポ大賞  
受賞作

# 2月10日ひとり日 真冬の日帰りツー

## 金子幹典 スズキGS400E

### 他にもキチガイが……

1時間程度の仮眠しかできなかった。顔と手足にクリームを十分にすりこむ。0時15分前、友人の酒井と中村が見送りに来た。中村は「考え直さないか?」と言うが、男は一度決めたらやらねばならぬのヨ。

やつらはバイオレットで(MCならなおよかったが)館林まで伴走してくれる。ウォームアップのつもりでペースは抑えめに、60~80km/h程度で走る。館林バイパスに入ったところで手を上げて別れる。止まるところでメゲてしまおうだから。「がんばれヨ」と声をかけてくれた。

R356をひた走る。まだ寒さは感じないから、今のうちに時間と距離をかせいでおかないと。まわりの車は皆スキー板を載せている。スキーに行くのか、じゃあ俺は何をしに行くのか? ふとそんな疑問が起きた。走っている俺の正面にはオリオン座。こいつはいかにも星座って感じがして好きだ。80~100km/hで走っていると、風の音が間断なくヘルメットのまわりでうず巻き、後ろへ飛び去っていく。車を追い越すたびにエキゾーストサウンドが割って入るが。

今京町で信号待ちをしていると、ライダーが左折してきた。次の信号で追いつく。練馬ナンバーのXL250S、やはり相当の重装備だ。そしてやはり寒対策を持っている。「どちらまで?」と俺。「十日町まで」と彼、「それじゃあ、R17で三国峠を越えて?」「そう」。「お宅は?」と彼、「直江津、日本海まで」と俺。幾度か信号で止まるたびに断片的な会話をする。アア、じゃあ伊勢崎までは一緒だ。

この季節、この時刻に雪国に行くツーリストがいる。キチガイは俺ひとりじゃなかったよと100円拾ったよううれしさを感じた。でもトレールは楽だろうな、雪道じゃ装備で200kgを超すGSはかなりシンドイだろうな……。

### 「なんのために」

またひとりになった。車の数も少なくなり寂しい。高崎市街へ入ったところのスナックの前で、1回めのメモ(時間・距離・気温)を記す。\*1:23、71.8km、

-0.5°C。店から出て来た体の不自由な男が、ホステス然とした女に送られて真夜中の街へ帰って行く。後ろ姿に人間臭さを感じた。

R18に乗る。徐々に標高が上がって、安中を過ぎ碓氷峠に近づいたがって寒さが増してきた。旧道に行くかバイパスにするか迷ったが、交通量の多さでバイパスを取る(旧道のほうが楽しめるのだ)。ここは2年振りかな。

手と足は冷え切ってしまっていることを聞いてくれず、数回シフトミスをする。トラックの後ろにつくとディーゼルスモッグが目にしみる。追い越すと闇。ライトの光は黒々とした路面に吸収され、次にどんなコーナーが始まるのかわからない。路肩には氷が、山にはまだ雪が残っている。無性に寒いと思ったら、ライトの光線の中で粉雪が舞っている(最初はホコリだと思った)。

果てなく感じられたバイパスもやがて終わり、料金所が現れた。ジャケットのチャックを開けて硬貨を出そうとするが、指が思うように屈伸してくれない。ここで2回めのメモ。\*2:23、115.2km、-6°C。マイナス6°Cノキツいな、そうだと缶コーヒーを買おう、熱いやつを、と思い販売機までヨロヨロと歩く。ハハハ、足がもつれとる。

停車中の4t車は、分厚い氷と雪のマスクで目野KLかふそうFKかわからない。この先大丈夫かな? 気温もどんどん下がるだろうし、引き返すかな、無理しちゃ本当に命落としかねないし。まだ6分の1程度の距離しか走ってないのに。やっぱり無謀なことなんだな……。迷った末、もう少し、せめて長野までは走ろうと自分に言い聞かす。「よし、走るんだ」。

シールドの中で前車のテールランプがにじんでいるのは、霜取りをタプリと吹いてあるせいで。波々と60km/hで走る——それ以上スピードを上げられない。100km/hを超すと目がチカチカする。「いくら着込んでもMCに乗れば同じ」と誰かが言ってたけど本当だ。電熱服がほしい。ハンドルカバーはだめ(直接風にさらされなければいいか)、ブーツの中の唐がらしもベケ。頭と心臓だけが生きているって実感。いや、頭の中もさつき

から堂々巡りしている——「なんのために?」。

### テメーラにはわかるメェノ

小諸市の街灯の下でメモする。\*3:09、130.2km、-6.5°C。長野まであと50kmあまり、1時間半ってとこかな。エンジンはしっかり1,000回転でアイドリングをする。「寒くなんかいないヤイノ」って感じて、やっぱり生身の体と機械の違いか。

前に大型トラックが2台走っている。遅い。3段落とし、半クラにして8,000回転、ギヤン、と、なんとトラックは3台。しかも前からはバスがバッシングしながら予想外の速さで近づいてくる。ヤバイノ 一瞬「マッドマックス」のワンシーンが頭の中をよぎる。抜けない、先頭と2台めとのすき間に入る。その瞬間バスが通過する。アコワ!! どうも神経が鈍っているようだ。

上田市。\*3:30、153.5km、-7°C。メモを取るのが目的で走ってるみたいだ。いや、ふえていくキロ数が、今の俺を走らせてるんだ。眠気を感じ、サッパリしようとしてシールドを上げると、フェイスマスクの口のあたりがバリバリ。メットの中で「真夜のドア」を口ずさむ。わからなくなると同じところの繰り返し。頭が重い、気がつくともわりに車の光がない、ひとりきりだ。対向車が来るとホッとする。

更埴市。\*4:04、177.0km、-6°C。長野まであとチョイ。路面は所々凍ってるけど雪はない。予想外のことで、MCにとっては非常にありがたいことなんだ。

長野市の標識が目に入る。やったァ、とにかく3分の1は走り切ったんだ。ところで長野野って県庁所在地だろ、俺の知っている宇都宮や前橋なんかとどことなく感じが違うナ、夜だからかな? なんて思ってるうち、セブンイレブンのある信号を直進してしまおう。上越は右となってみたいだけれど……300m行って、ウン、やっぱり間違ったみたいと感じてUターン。

ついでにMCを止めて小便をする。さすがに冷えるから近いワ。しかしその行為に至るまでが大変で、サロバンのファスナーを開け、トレパンを下げ、インナーウェアのファスナーを上げると、やっとグンゼYGのパンツに到達するが、凍えた指でやるもどかしさ。星、もう空一面に散らばっている星を見ている。アレ? 地面もキラキラ光ってるぞ……けとばすと

# 本海へ リング

(1981年1月号より)

つま先がジーン。コンクリート並みに凍っている。\*5:05、193.2km、-5.5°C。

この先どうなるかわからないからなにか食っておかなくちゃ、というわけで、さっきのセブンイレブンで休むことにする。客の大部分はスキーに行く諸氏で、MCライダーの俺は注目される。カップめん、中華まん、ガム、チョコレート、ドーナツを買い込み、店内で中華まんを食べ、さらにドーナツも押し込む。それにしては暖かいこと、寝込みたくなるワ。でも行かねばならぬ日本海ノ と思いつつも、15分ほど休憩。

表へ出てGSに火を入れると、数人のアンチャンが「ヘュー、土浦から」「やっぱり寒い?」「バイクでニュー」etc…。そのニュアンスが軽蔑なので、非常に気分が悪かった。しょせんテメーラにはわかるメー!

## \*1m<sup>2</sup>の部屋で仮眠

道路情報では「野尻・妙高方面全面凍結」となっている。そこまで少しでも時間をかせごうと思うが、やはり60km/h以上はつらい。ここあたりからは去年の夏に走ったはずだが、記憶と一致する所はどこにもない。野尻湖まで23km、18km、16kmと近づくにしたがい、左へ右へのコーナーの繰り返しとなる。

信濃町。\*5:49、221.9km、-8°C。ふと気がつくとき、まわりの山はだや畑が青白い光を発している。一面の銀世界。対向車はチェーンを路面にたたきつけて走っている。路肩には50cmくらいに雪が積まれている。夜明けはまだだし、それに雪道じゃ走れないだろうと考え、道端の食堂の前の電話ボックスの中で休むことにする。

チョコレートを食べ、コンロでボックスのまわりにある雪を溶かして紅茶をいれるが、暖かさはまったく感じない。無性に眠い。コンロの燃焼音が心地よくさきさき。バッグに腰かけていたら寝てしまった…いや、完全には眠っていない。友だちのいる風景を見て、話しかけている。そして頭の中でこれは愛なんだと理解している。もう寒さは感じない。

車の止まる音で正気に返る。大分明るくなったようだ。だがもう少し\*1m<sup>2</sup>の部屋にいよう。——二度めに目を開けたときには、もうライトなしでも走れるほどになっていた。40分もたっていたがGSは1発で起きる。

走り出すとすぐアイスバーンになった。

この先の妙高越えを思いゾーとする。30km/h弱のスロー&スロー、もちろんノンブレーキで、なんとか前に進むところ。しかし、ストレートでもカウンターが必要なんだ、この道は。オットットと足をバクつかせながらも関川を越えて新潟県に入り、今回初めての写真を撮る。両側には2~3mの積雪。

もうダメだなと、消防署の前で、このツーリングのために買ったチェーンを巻く。で、その効果はというと、なんとまっすぐ走るので、急激なスロットル操作をするときさすがにスキッドをするけどそれがまた面白い。後輪のトラクションの大切さを再発見。もっと早く巻けばよかった。問題は、見た目には弱いチェーンがどの程度もってくれるかということだけだ。

## ほしかったものがあった

ひと安心で再出発。ここまで来ると、道の両側に雪の壁ができて、というよりも掘られたみぞの底を、そう、ポプスレーのコースを走ってみたい。この道、確か「雪国街道」って名がついてたナ。その詩的な名前がビックリの、幻想的な光景が展開していく。関東平野の住人にはため息が出ちゃう、そんな感じで、眠気もフツ飛んだ。もう、日本海は、手を伸ばせば届く距離にある。

新井町。\*7:42、256.0km、-2°C。直江津まであと20kmぐらいか、1時間かかるかな? なんてはなしに心ははやっている。町の中では道路の真ん中からビューッと水が出ている。確かに雪は溶けてるけど、20cmぐらゐの水たまりができていてブーツがグショグショ。おまけに対向車が溶けた雪+水を溶びせてくれる、ミジメ虫。

上越市。\*8:31、267.9km、0°C。あとチョイ。でもすごいネー、メインストリートは普通なら4車線+αなのに、今は道の両わきに雪の山ができて、端っこをオタオタと走る俺のすぐそばを、ブォーン、シャラシャラーと車が走り抜ける。もう少し気を付けてヨ、こっちは必死なんだから。

人通りも多くなって、俺に異端者を見るふうに、鋭い視線を投げつける。でもミゾレまじりの雪が降り、シールドを通して見る世界はファンタスティック! 気温も上がり、少しは余裕も出てきたみたいだ。

直江津市に入る。市内には向かわず富山方面へ。不思議と直江津の道には雪がない。トンネルを抜け出ると右手に直江津港、そして突然、視界に割り込んできた日本海ノ存在ノ やった、着いたぜ!! 海岸通りの駐車場にGSを入れる。目の前には「冬の日本海」が確かに

あった。\*8:32、276.8km、気温は2°C。8時間半か……。

しかし、なんて色だ、たえようがない。今の感触はとても言葉にはならない。大陸から吹きつける風が泣き、雪がアラレにかわり、水平線の舞台では、灰色の雲がわき上がり不思議な形に変化して死んだ。\*動\*じゃない、変化し続ける一瞬の\*静\*。体中の力が抜けていく。もうなにもほしくない、いつまでも海を見ていたい。荒々しい海とは正反対に、俺の中には「安らぎ」があった。満たされたって気分だ。

## ノンストップの帰り道

30分が過ぎた。海鳴りをもっと聞いていたいがそうもいかない。また300km弱を走らなきゃならないから。

直江津の街に入ってみる。イイ感じの街並みで、歩いたら楽しそう。雪解け水で一面水没しの路地で、赤いホッペをした女の子なんか遊んでいる。やっぱり古河の街とは全然違ったふんいきがある。港にも行ってみる。あんまり活気はなく静かだった。カモメが飛んだ瞬間をねらってGSをバチリ。しばらくブラブラと市内を走っていたら、10時近くなった。帰ろう。

妙高に近づくとかかなり渋滞している。200台くらいの車を抜き先頭に出たら、なんと道路封鎖。黄色いルーチェの兄ちゃんが係の人に盛んに食いついてるが、俺は焦ってもしょうがないのでGSの上でウトウト、15分ほどしたら解除になった。

もう道路にはほとんど雪はなく、朝の状態がウツミだ。ただ一心に家に向かうのです。「俺は帰るんだ!」ってコメントにしたがって、ひたすらスロットルを開け続ける。空腹感もなく(食ったら走れなくなつたらう)、ただ慢性的な眠気と闘うのみ。前を走ってる車を抜き去り、信号では一番前に出る。その走りには思考はなく、条件反射的なものだ。

軽井沢でガスを入れたら8リあまり入った。さすがに燃費も落ちてる。碓氷峠を下ったのが1時30分、かなり気温が高くさらに眠くなり、なんと伊勢崎市から尾島町までは走った記憶がない! という半居眠り運転。

あと20km、15km、6km、…もう半分死んだ気分になった自分の体にカットを入れ帰って来ましたマイタウン、古河。4時16分、トリップメーターは580kmを超えたところ。いつもなら旅の終わりには一抔のむなしさを感じるが、今はただふろに入って寝たい。とにかく終わった!

## ◆データ◆

- <全走行距離 584km>
- <平均燃費 22km/l>
- <全費用 2,800円>

★ヤマハBZ250モニター&パワーツピ  
プレゼント当選者決定ノ  
290ページ

# 北関東の6日間



針谷 宏 ？歳 ヤマハDT125M

栃木県小山市

## ゴキゲンな走り

<8月18日>

初日のターゲットは、奥利根湖。中禅寺湖を左に見ながらゴキゲンに飛ばし、白樺の林を抜けると、見慣れた戦場ヶ原が広がる。

このまわりには何本かの林道があり、そこを走った後は戦場ヶ原でひと休みするのが僕の常だが、そのときDTを駐車場に置かず、売店の前に横付けにする。そうしているとなぜか、オフロードのコスチュームに身を固めたライダーが、同じように愛車を横付けしてくる。「これから林道ですか?」。いつもこのセリフで会話が始まり、「速いんでしょ?」「いやあ、そうでもないっすよ!」で、さあ行きましょ、となる。

ひとりで来るとたいいこうなるから、ダートランナーの人たちは連帯感が強いのかな、なんて思ってしまう。しかし、今日みたいにとろい

(失礼)観光客の車でいっぱいのはきは、みんな戦場ヶ原を素通りして行ってしまうのが残念だ。

さて、今回の相棒を紹介しよう。まず、ユニオンジャックカラーに塗りがえしたハスラー50で、ワイリーさせればシリモチをついてもなお走り続けるといふテクを持つ、ポップアップトリックの神様の彼を「ナマズ」と覚えてほしい。

そして、緑のハスラーに乗り、バンザイジャンプを1回だけキメた際に、両足までバンザイして急所を打ったという暗い過去を持ち、今回は左足を打撲しているながらも「うちみ」と称して参加してくれたグレートな彼は「テッチ」。

僕はDT125に乗っている。「ハリヤー」と覚えてほしい。

以上3名および3台で、金精道路の景色とコーナーを楽しみ、これまたコーナーの楽しいR120をヒラリヒラリと流す。荷物満載でコーナー

スポーツ心を満喫しながら林道を走る。ゴキゲンな自然とのふれあい、仲間との語らい。そして那須高原で、僕らは台風15号の接近を知った。……やがて台風は去り、日光に再び青空がもどってきた。空があんなにまぶしく見えたのは、生まれて初めてだった——。

を攻める趣味はない——と言いつつも、ベースが次第に上がってきたりして……。片品村で右折、尾瀬戸倉で左折して湯ノ小屋林道へと進入。

5時、奥利根湖が見えてきた。今夜は藤原スキー場に泊まることにして、大斜面を一気に駆け上がる。ローギヤードにしたDTは2速でグイグイ登ってしまう。ターンして今度は一気に駆け下りた。ギャップでDTとともに一瞬空を飛ぶ。モノサスとヒザサスが、しなやかにショックを受け止める——クールな気分になっていると、何か変だ。シュラフを落つことしてしまった……。

<本日の走行 200km>

## テッチが「マッチ」?

<8月19日>

5時起床。昨夜は上半身裸だったテッチが、今朝は上衣まで着て寝ている。いつ着たのか本人も知らないという。僕は、家に帰って「びったしカンカン」を見てフロに入り、ワーブして帰ってくる夢を見た。

6時、雨が落ちてきてしまった。

## ゴキゲンな 僕らの遠柔路!

### 北関東の6日間ゴキゲンな 遠柔路!



台風の去った後のゴキゲンな大笹林道いじけて少し寝たが、仕方なく10時に出発。しかし水上有料道路で、バックミラーに光る太陽を発見。R17に入るとすっかり晴れ上がった。3人は狂喜して合羽を脱いだ。三国トンネルを抜けるとまた雨だったのである…仕方なく、再び合羽を着て奥只見湖を目指す。霧の枝折峠を越え、銀山平が見えてくると、3人はアクセル全開でバンクのジャリをけ散らし、湖目がけて走った。さっそく湖畔にテントを張り、米を炊いたら、持ってきた鉄板を火にかける。肉・モヤシ・ソーセージなどをプチ込むと、景気いい音をたててみるみるうちに焼けあがる。ほおをふくらませながら、たら

ふく食べた。  
今夜は星が見えている。ものすごい数だ。テッチはテントの中で、妹から「絶対なくさないでよ!」という厳しい条件で借りてきた、マッチ(近藤真彦)のコンサートに使ったというペンライトを振りかざし、「マッチ、マッチ」「バカヤロー!」とひとりて騒いでいた。

〈本日の走行 151km〉

〈8月20日〉

朝モヤのかかった湖に、朝日が反射してまぶしい。最高の朝だ。手がしびれるほど冷たい水で顔を洗うと僕は顔全体に「新潟」を感じたのだった。

奥只見湖畔を正確にトレースするR352は、鋭いコーナーばかりだが狭すぎて攻めるのは無理だ。道は奥只見林道のダートになり一度湖から離れるが、峠をいくつか越えると再びグリーン湖が顔を出す。この辺

の交通は、もっぱら舟が使われている。この林道を走れば、その理由がわかる。舟で行ったほうが早いから、この林道は曲がりくねり、上下しているのだ。

#### 林道でキャンプ

そんなダートがアスファルトにかわると、すぐ福島県。東北の最高峰燧岳を初めとするゴキゲンな景色についてベースは落ちぎみ。沼山峠へ右折し、ダートを登っていくと尾瀬はすぐそこだ。行き止まりの駐車場に愛車を止め、歩道を登り出すと早々に「コンチワ」のあいさつを交わした。ま、ピースサインと似たようなものだ。

15分も歩くと視界が開け、尾瀬沼を見ることができた。だがここからさらに45分かかるといっているので、引き返す。軟弱だナァ?

引き返すと聞いてガゼン元気の出



たテッチは、下りの階段を全開で走っていく。それを見ていたナマズが彼をちょっと押すと、テッチはウルトラマンに変身し空を飛んだ。カッコよかったが、今度は右足をしたたか打ったらしく、両足を抱えて痛がっている。真っ昼間からにぎやかな男だ。

再び R352 を走り、中山峠を越え R121 に合流、水無川沿いの大川林道へ入る。これがとにかく恐ろしい道で、ガードレールもない。角のある石がゴロゴロしていて、ちょっとよそ見しようものならガケ下に真っ逆さま。それも並みの高さじゃない。

ここをずっと行くと湖があるはずで、湖を過ぎればすぐ那須なのだが、もう5時を回っている。那須まで行けなくてもいい、せめて栃木県内でキャンプがしたかった。県境を示すものはまだ見ていない。ここはどこなんだろう？ 3人とも焦っているのがわかる。笑うに笑えない。

5時半を回った。僕は止まった。これ以上走ったら、キャンプの準備がやりにくくなる。河原にテントを張った。しかし、川の流れがさっきと逆だ。ということは、ここは栃木県「栃木や、栃木」ふたりに息を切らして地図を見せながら説明する。3人の顔は急に明るくなった。

それにしても、ふるさと栃木に入れたということがわかっただけで、



▲奥只見湖畔の朝。手を振るナマズ(左)とコーヒーをすするテッチ(右)

こんなにも気持ちがかわるものなのだろうか。チャーハンがうまい、サラダもうまい。例によってワイルドに食べた。〈本日の走行 222km〉

### 雨も全開！

＜8月21日＞

昨日の天気はウソのように、今日は雨。那須では遊び回る予定だったが、霧で何も見えない。それでも一応、りんどう湖に寄ってひと歩きし、ラーメンの昼食をとる。このとき僕らは、テレビで台風15号が接近中ということを知った。明日もあさっても雨だという。しかし、人一倍元気のいい僕らは、台風の中を走つたろうやないか、ということを出発。

日塩紅葉ラインは28kmの長さをもつ、タイトコーナーの多い有料道路だ。テッチがコーナーに燃えている。はきかえたトレールウイングのグリップはいい。土踏まずをステップに

乗せているとブーツがすり減る。リヤが滑るときのあの殺気に快感を覚えつつ、下りのコーナーを攻める。五十里湖からは、待望の安々森林林道に入った。ウワサどおり走りやすい林道だ。ジャリが敷いてないので面白いようにカウンターが決まる。対向車を気にしてブラインドコーナーはゆっくり回ったが、車にも人にも一度も会わなかった。

今夜の宿は、屋根がほしくて、R352の橋の下にした。宿を捜す時間になると雨がやんでくれるのが、非常に助かる。

〈本日の走行 195km〉

＜8月22日＞

橋の下から空を見ると、東に雨雲、西は青空となっている。朝食後、モーニングランに出かけ、深さ30cm、幅20mぐらいの川を渡る。僕とテッチは無事渡り切ったが、ナマズは途中でウイリーをやろうとしたところ

## 新潟

にきたらお立寄り  
下さい

## モーターサイクル 専門店 アルファ

※ステッカー希望の方は◎200円を同封して本店へ

**東新潟本店**

東新潟駅前	アルファ東新潟本店	橋元屋
リアイクス	笹口ショッピングセンター	西ノ本バスターミナル

〒950 新潟市笹口448番地  
☎(0252)41-6439

★ホンダ・セブティースポーツショップ  
★カワサキ・ヤマハ・スズキ特約店  
◎MC常時200台展示  
◎MC用品=在庫多数

### モーターサイクルショップ

# アルファ

MOTOR CYCLE SHOP

**西新潟店**

明大橋	ホンダショップ新潟	ホンカーハン
有明大橋	←小針 国道116号線	

↑アルファ  
西新潟店

〒951 新潟市有明大橋町6の21  
☎(0252)67-5335

# TOURING REPORT

★「フリーデイング」感覚を企画に載せて走る「フリーデイング」2月号は12月24日発売!

転倒し、ぬれナマズとなった?!

川渡りの後は田代山林道だ。だが登っていくにつれ雨が強くなってきた。赤茶けた水が林道を流れる。全身に水をかぶりながら登る。峠を越えた。霧の向こうは雄大な景色のほずの所だ。地面が赤土から真っ黒な土にかわった。水しぶきが、スロービデオのように跳ね上がっては落ちる。

3人とも気合いが入っている。テッチは水たまりをモノともせず全開でコーナリング。ナマズはポップアップトリックで水たまりを飛び越える。僕は後輪をわだちにつけてのドリフト走行。

そして、川俣湖が見えたときには雨も全開。次は山王林道を走るつもりだったが、この雨では道が崩れかねない。キャンプも危険だ、と意見が合って、民宿に飛び込んだ。

夕食は山菜を主とする料理で、僕とテッチは残さず食べたが、ナマズはゼンマイを初めとする山菜群にたじろいで、山鳥の肉ばかり食べていた。 <本日の走行 55km>

## 台風一過の林道を走る

<8月23日>

外は大雨。ゴキゲンナナメだ。だが12時、雲が途切れ始めた。30km/hぐらいで動いていた台風が、上陸したら70km/hに加速して北へ向かったそうだ。まるでRZみたいな台風だ。「よし、出発だ」と荷造りを始めたが、ブルドーザーが来るまで待てと言われる。しかし宿の姉さんが物わかりのいい人で、「若いもんは何言たって聞かないから。気をつけて行ってらっしゃい」と言ってくれた。

宿泊客の人たちにも激励されて出発する。ライダーの意地にかけても無事に帰らなければならない。道をふさぐ土砂を慎重にクリアして、県道を霧降高原へ走る。全面川になっていたり、アスファルトがはがれたりしているが、難なくクリア。大笹林道に入るころには、すっかり晴れ上がっていた。

久しぶりのドライのコーナーを攻める。空があんなに青い。僕のDTのゴロワーズカラーと同じ色だ。ナナメだったゴキゲンが真直角になると、日光の町。いろは坂は通行止めという。僕らは裏男体山林道を登ることになった。

だが登るにつれ、台風の激しさを見せつけられた。深いミゾとムキ出しになった岩。引き返してきたXL250氏が、125じゃ無理だと言う。上からクラッチを焼き付かせたというKE125が下ってきて、一瞬ビビるが、僕らは無謀にも荷物満載で登っていった。

テッチは低速の効かなくなったハスラーをもてあまし、右に左にコケまくりクラッチレバーを折った。彼はバタ足ができないのだ。テッチを一番よく粘るナマズのハスラーに乗せ、ナマズがDT、僕がノークラハスラーに乗る。発進は全開でギヤを入れ、ホイールスピンさせてバタ足しながら加速する。練習でコケまくったので、変なことがうまくなってしまった。

全開でロックをかわしながら登っていくが、遠くの山並みに夕日が沈む。もう走れない。テッチも苦しそうだ。残念だが、後退。

下りはDTに乗る。ミゾにはまったら転倒は免れない。冷や汗がびっしょりだ。3時間ぶりに日光の町に出たときには、とっぷりと日は暮れていた。テッチに笑顔がもどった。

ナマズもご苦労さん。

真っ暗な杉並木を飛ばしている。6日間のうちに会った人の顔が、次々と浮かんできた。信号でウイリーをキメたら、前輪はひときわ高くなった。 <本日の走行 183km>

### ◆データ◆

<全走行距離 1,006km>

<平均燃費 30km/l>

<平均速度 なんと20km/hノ>

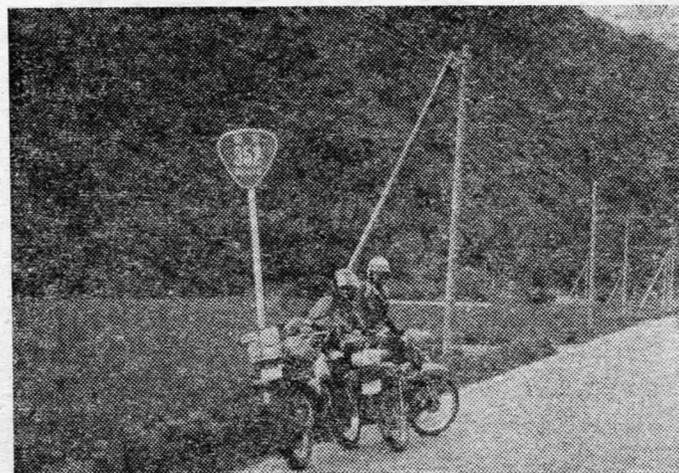
<費用 ひとり約15,000円>

### 〔後記〕

僕たちのテーマは「身近な所に目をつけよう」というものです。6日間もあればもっと速くへも行けますが、「〇〇まで行ってきたよ」と後で報告して自慢するような旅ではなく、6日間、自然の中へ、完全にではありませんが自分を放り出してみるだけの旅を、あえてしてみたわけです。

山の中ばかり走るので「出会い」はあまり期待していなかったのですが、今でもお世話になった人たちが林道で会ったライダーたちの顔が思い出されます。台風も、今となってはいい思い出になりました。

最後に、キャンプでは小さなスコップと大ロブライヤー、それに金ノコの歯を持っていくとわりと使い道があるということ、鉄板1枚持っていけば食事がずっと楽しくなるということ、それに折りたたみの小さなイスは意外によく使ったということ、ここに報告しておきます。



※R352のフラーラインは、道の両側に花が一杯ノ